目次

▲論說
山瀨辨次郎氏を追憶す
島根縣の一瞥
岐蘇林友を如何にすべきか
余の測高器付輪尺
士地は資本なりや
風塵百題
▲文苑
赤石山に登る記
山上雜記
山、山、山
國境のれもひ
▲雜報
數件

大正五年九月二十五日　第八拾參號　（毎月廿五日定期刊行）（明治三十四年六月十四日第三種郵便物認可）

論說

山瀨辨次郎氏を追憶す

高樋生

母校創立の一功勞者なる同氏の七周忌に於て一言追憶の辭を陳ぶる處あらんとす

今や南は臺灣の熱地より北は朔風膚肉を裂く北海の邊土に至る迄帝國の全土を被覆し尙且之れを狹しとし其羽翼遠く南洋滿州北米の異域に伸びて其盛名を張れる木曾山林綱の力や嗚呼又熾烈なる哉と吾徒四百の蘇友と共に其壯を悅び益々夫が進展を祈れる我が縣立木曾山林學校も其今日あらしためる十數年間の迂余曲折を辿る時は決して偶然にあらざるを知るべし

世の諺語に聞く「始むるは其半を成す」と吾人は過去十有七年前なる明治三十三年本校創立當時を追想探究し以て創立主唱者を闡明し亦其當時に於ける郡當局の遺績を新にし本校の盛大と共に一層其の卓見と功績とを嘆賞する丈けの餘裕あらまほしきを希ふものなり

今我徒をして當時の記憶を基礎とせる母校創立の經過を判定せしめんか彼の六軒町なる稻荷社の祠然たる舊母校々舍が西筑摩郡組合立高等小學校としての用途を失ふに及び該校舍轉用の必要は蘇峽に適すべき低度の徒弟若くは乙種の實業學校創立を企畫せしむるに至れるものと思料せらる而して此目的に向へる發足の第一歩が同年七月靜岡市に開催せられし大日本山林會なりしは天の時を得たるものにして此調査に當れる郡內志士十壹名が歸來時の郡長故渡邊秀之丞氏武居郡會議長等と共に郡立乙種山林學校の創立を劃策決行せられしは事實なれども當時の郡經濟より考察する時は僻陬なる蘇峽は當時其富力に於て縣下の最下位にあり此時に於ける郡費幾千圓支出事業の容易ならざりしは推察に不難其の之れを斷行せしむるに至れる主たる力の所有者こそ實に今日あらしめたる本源にして吾人の最も嘆美すべき人物なりとす而して余は去る四十年頃偶山瀨氏に會し當時の追懷談を聞くに及び母校創立の動機が靜岡市に於ける大日本山林會總會の席上氏が本多博士の「林學教育の振興……」なる講演に感奮せし結果なりしを知り同氏の性格と識見の如何に母校創立に傾倒せられしかを察し併せて吾徒在學當時同氏は公私用を問はず出福毎に必ず校門を叩き親しく我師徒の間に伍して我校の發展を企畫せられ或は誠意の余り時の校長又は郡當局者に苦言を呈せしを聞き如何に愛校の念强烈なりしかを察し私かに其篤志を謝すると共に氏の健康を祈れり

然るに天の氏に時を假すに吝なる去る明治四十三年七月三日不慮の災に罹り遽に異域の客となり早くも本日を以て七周忌を迎ふるに至る嗚呼又人世味氣なきの感なき能は

ざるなり

余は茲に我四百の蘇友と共に同氏の七周忌を送るべく痛悼の感抑へ難きものあると同時に併せて我同窓諸君が木曾大桑村長野なる同氏の墓前に手向け又病床に惱める氏の未亡人に面接慰籍せらるゝ日あらんことを切に望むもの也(七月三日於輕井澤鴫屋旅館)

嶋根縣の一瞥

宇紫生

頃者第二十六回大日本山林大會參列の爲松江市に至り一行と共に視察旅行に加はりて隱岐を巡り大社參拜後解散し同縣の一斑を觀察す元より仲夏炎々の暑熱の下に汗を絞りつゝ見聞よりも先涼風と、氷と、安眠とを欲求せるの際到底一瞥も亦怪しき一瞥ならずとせざるも一瞥即ち是れ一瞥送迎の風光と、事物と、感想と混然として浮び出づるもの即ち是れなり、幸に諒せられん事を望む

○京都に車を換へて大社行に乘込めば山林局長、川瀨、本多博士の一行は一等車に其他松江に向ふ本邦林業界の代表的諸星車に充滿し保津川の風光も何も暑熱に熱殺せられて苦しさ云ふ許りなし、蓋し此車參列者の最も好都合なる唯一のものなるを以てなり

○山に入るものは山を語らず森林を職とするもの森林に好奇の念なし、余輩は一隅に諸大家の浮世話を拜聞す、已にして車は谷を渡り山峽を過ぎ但馬の海濱を西走して鳥取を過ぐ北陸の風物又眼に新たなるものあるも二日間の車旅、窓外に目を留むべくもあらず、米子を過ぐれば即ち出雪(嶋根縣)に入る內海の靜波、夕暉に映じ、微風徐ろに面を打てば、生氣頓に甦る、

○午後六時松江市に着す、狹隘の旅舍に呻吟せんよりはと宍道湖に架せる橋上に杖を曳く、湖中の嫁が島は松樹僅かに一抹の雲煙の如く湖畔、櫛比せる旅舍、青樓、波に映じ、漁舟と貨舟と欸乃相應ず已にして月光湖上に照り渡れば晝間の暑熱今何れにかある一樓に上りて飽くなき月と水と橋と人との情景に詩趣をやれば夜已に更けて靜寂の間一層の趣を加へ來るを見る

○表面的觀察を以てすれば松江は水の街にして夏の都ならずんばあらず其松平十八万石の城址も跼蹐せる市街も名產靑瑪瑙の賣店も宍道湖を對象とし其水の流に映じて以て其生命を保ち且顯揚せしむとや云はん風光と美人系の發源地たる松江を說くは余輩の如き無風流にして無粹なる漢の容嘴すべきにあらず世の定評已に存せり

○翌十五日同市高等女學校に山林大會開かる來り會するもの無慮千名北陸の島根として能くも集つたるものと云はざるべからず大阪某新聞の評によれば隱岐の視察てふ一事が好奇的人心に投ずる當つたるものなりと余輩は其言の眞僞を穿索する程の餘裕を有せざるなり

○大會の批評は茲に述ぶべき限りにあらずとや云はんも世に大會とか總會とか稱するものの餘りに御祭的となり、餘りに形式的に終るもの多きは識者の一顧を要する事項ならずんばあらず勿論此等の會合が直接世に裨益するものにあらずして之によつて一般に又來會者に刺戟と興奮とを與へ間接に於ける効果を期待すと共に會の存在上及存在を廣告し好影響を與へんとするの努力に外ならざるべきや明なりと雖常に同一轍を踐み後日に貽すべき何等かの事項を存せざるに於ては何々社の大祭と選ぶ處なきは爭ふべからず、

○本邦林業界の權威者を網羅し有識者經驗家を羅致して御定的の式辭、祝辭と、且最も有益事項なるべき講演も短時間に切上げられ多數の來會者は自己の意見を吐露するの機會もなく又相互間の意見の交換も之を爲すに由なからんとす、

○本邦林業界には施設奬勵を要すべき政府及府縣の事業は太より民間に於ても亦各種の欠陷に對して欲求する處の問題尠少からざるは云ふ迄もなし、然るに是を政治界に見るも、林業の工業化せられたる事業に就ては商工黨(實業家とは現今商工家の代名詞にして農林家の如きは何れに屬するやも知るべからず)の勢力

庇によつて護せらるゝもの多きも純農純林は虐げられたる傾なくんばあらず殊に林業に至りては眞に之を代表すべき一人の代議士をも有せざるべし而じて尙農業は農業の代表的機關稍備れるも林業にありて民間意示の表示交換を窺ひ得べきものゝ僅かに大日本山林會の一あるのみ(府縣山林會のあるありと雖是等は基礎鞏固にして農會に拮抗して活動せるもの一つもあるなし酷評せば三厘會たるもの多く縣の補助によゝ縣の補助機關にして形式は人並に備はるも尙石炭なきエンヂンの如も)

○吾人は是の唯一の機關の大會に際しては林業の代表者が平常懷抱せる意見を開放して討究を加へ請願すべきもの委任すべきもの實行すべきもの開申すべきもの夫々に對して共鳴せる意志の下に結束して奮起せば世を益し斯業家を利するもの蓋し鮮少ならざるあるを云はんと欲す

○近頃紙上に見る處によれば獨逸は戰後の交通界に意を致し巨船を建造せんとするの準備已になれりと未來を追ふて現在に努力するもの是興國の民にして隆盛の起因此の裡に存せり

○吾人の靑輩今此の言を爲すもの唯遲々たる本邦林業が有識と云はず從業者と云はず一樣に責任ある國民の一員として其主張を張り其研鑽を貫き以て結束せる大なる力の下に有効に活躍せられ新興の國家に相應せる事績を顯揚せん事を切望するが故に外ならざるなり

○島根の一瞥は一躍して大問題に脫線し筆の行く處今や止むべに由なきに至れり乞ふ書生論として笑讀せられん事を(次號に於て眞の一瞥を御目に掛け申候呵々)

岐蘇林友を如何にすべきや (承前其二)

丸山岩吉

三、林友の現況と改革の要點

林友の現況を說く前に校友會の現況を說きたかつたけれ共うはあまりに大なる範圍に涉りさうであつたから、校友會機關雜誌としての林友の現況を論ずるうちにうれの一斑を閃めかさうと思ふ。

凡そ林友の現況程悲境にあるものは少いやうな氣がする。唯從來の慣行上刊行するといふ以外別段な意味をうの上に附せられてないやうである。といふと少しく言ひ過ぎたかも知れないしかし僕はこれを疑ふ。凡う吾四百の校友中、幾人かこの林友に關して確たる自覺を持つて居るだらうかと。否うれに對して省察らしい省察を加へようとする人が抑々幾人あるだらうか。林友はつまらない〳〵といふそのことが、自分自身を否定することなるを知つて、苦悶らしい苦悶を見せる人が諸兄の中に幾人有り得るだらうか。各地に散在して居る校友のうちに雜誌代の不納者が少くないといふ事實が、遺憾なくこれに決定を與へる。林友は或一部の校友の上にしかその存在を認められてない。否總ての校友諸兄によつて、その存在を認められつゝあるかも知れないけれど唯單にうれ丈である。吾々はうれ以上を要求する。吾と校友會の關係、校友會と林友との關係、林友と吾との關係、この三者を完全に理解した後でなければ、決して林友の理想を完全に近く發揮することは出來ない。隨つて校友會といふものを不徹底な、有名無實てふものとの距離を近づけ行くことになり終る。吾等は吾自覺の性情に基いて校友會を組織した。校友會はその目的を完全に遂行する機關として林友を發刊した。故に林友は吾々が機關であり所有である。この三者の關係を明確に理解する必要がある。事實この自覺の上に立つてのみ愛が完全に働くものである。

改革を論ずる人々は、うの形式の改革を論ずる前にこの根本問題に向つて烽火を擧げるべきであつた。しかしうの烽火は單なる刺戟としての意義しか持たない。これに關する幾多の叫びが遂に不結果に終つた時うの時こそ林友は眞に一部の人々の所有となり終ると共に、校友會本來の意義を全く破壞する時である。

校友一般の自覺を起さない限り、林友の改革を論ずるは愚であり野暮である。現在の林友が如何にその內容及外形に於て整備

されてあつたにしても、この自覺の上に立たざる以上無意味であり、無價値である。

かゝる狀態に陷つた原因及其過程について論究することも亦無意味ではなかつた。けれども他に論ずべき多くの問題を所有して居るが故に敢てこれを省くことにした。

校友一般の自覺を起さない限り改革を論するは愚であり野暮であるとはいへ、林友の形式の改革が、この自覺の促進に向つて何等かの力を附與し得はしないかといふ疑問の生ずるが故に以下簡單に其現況と改革の要點とについて論究して見ようと思ふ。

本論の頭初に僕は「林友の現況に全き滿足を感ずつゝある人は少い」と書いた。これに說明を與へることが林友の現況の論究になることを思ふが故に、これより少しく此についての說明を試みよう。

月々の林友を手にした時、御馳走の殘骸を見せつけられたやうな失望と腹立たしさとが、うの喜びの裏から烈しく發散する。吾々はこの感情のよつて來る所を究明しなくてはならぬ。

林友の卷頭を飾るものゝうちに、吾々に向つて大じた意義を示して呉れない林學の講話樣のものがある。更に面白くもない統計樣のものがある。それに行き當つた時、「何だつまらない」といつた本能的の嘲笑が湧いて、ひれを見ようとする氣は更に起らない。

次に其人衷心の聲でない、即ち內容の空虛な論議がある。「憐れなる者よ」といつたやうな憐憫的冷笑がうの讀後感である。

更に美しい言葉の連結のみを知つて、何物をもその內に盛ることを知らない才子達の所謂美文がある。「何の心算で……」皮肉と罵詈とより外吾々の上に齎さない。

外にも屑はあらうけれど、大体この三つが林友を貧弱にして居る大なる要素である。

この間にあつて、眞率なる研究の上に立つた報導や、眞面目なる調査の餘りに成つた報告やが偶々掲げられて、吾々に向つて崇敬の念を惹起せしめ、學校記事、校友會記事、寄宿舍通信などがあつて、懷しさと愛みとをうゝる。尙會員消息といふものがあつて愛する人達の移動を知らしてくれる。

この外各地の校友諸兄からの、うの周圍の空氣に對する比較的因れない觀察や、人々の人の閃きを見せる比較的眞率なる感想やがあつたりして、吾々を喜ばしてくれることもある。その代り修學旅行日誌などゝ銘打たれた、何等の獨創を持たない無趣味なものがあつたり、無自覺な古人の駄洒落に過ぎなかつた「閑人の遊戯」てふ語を、唯一の箴言として物したやうな詩歌があつたりして、折角の林友を其儘紙屑籠に投せしめるやうなことがある。

此の二つ——好感を與へて呉れるものと不快の念を起させるものとを、天秤の兩皿に載せて秤量するとき、本能的に林友を愛する情を全く拔さにしたならば、その後者に向つて天秤の針が傾きばしなかつたらうか。

これを纏めて言つて見れば、自覺の足りない人々の機關たる林友なるの故か、內容の洗練が不足し過ぎる。何等かの自覺と信念との下に書かれるもの以外に單なる思ひ付きで書かれたらしいものが混じてある。又うの何等かの信念の下に立つたものゝうちにも博大なる理解の缺けた憾みあるものが決して少くない。

林友は其理想の半を達し得たかどうかが頗る疑問である。

こゝまで來て始めて本論の主要眼目とする「如何にして林友を改革すべきや」といふ問題が論じられるべきである。

改革の第一歩、そは唯一つである。即ちこの林友の爲めに何等かの好感を寄せて筆する人々に一定の自覺と信念と、而して博大なる理解とを要求するといふうれである。かく「一定の自覺と信念と而して博大な理解と」などいふと、あまりに抽象的に響くかも知れない。しかしこれ迄說いた總てを聞かれしならば、こは自ら明らであらうと思ふ。即ち林友と現況とを覺り、其書かんと欲するものが此の兩者の接近の爲に何等かの意義を附與するものなりとの信念を抱き、而して其信ずる所が何故に誤なきやを

理解する唯之丈のことである。

これ丈の省察を吾愛好する林友執筆者の爲めに要求する。これが現下に於て最も緊要なる、林友乃至校友會改革の最初の踏み出しであることを思ふが故に。

しかしこれは林友改革家の態度論であつて、「林友を如何に改革すべきや」といふ疑問の解決にはならない。この疑問の內容は林友の形式に涉つて居るものなる以上、うの解案と亦其形式に就ての改革法に涉つたものでなければならぬ。

林友の卷頭、即ち今迄の研究欄は、今少し洗練する必要がある。校友の眞面目なる研究の報告及其經驗の告白等、眞に尊敬に價するもののみを掲載し度い。此の欄の設けられた本來の意義はこゝにあつたのではなからうか。しかしそれのを待つことは每號の紙上を賑はすに足らないかも知れない。然るときは此の欄を廢欄にすることも惡くはないけれど、それよりは寧ろ校友各自に向つて緊要な、林學若くは林業、又は一般科學上の問題を解說した方がよからうと思ふ。此の欄の有として卷頭の二三頁を附與すべきか。四頁以上に涉つては既に嘘である。

論說欄及文苑欄、此等はどうかして今少し異色あるものにし度い。欄名などはどうでもいゝが、此等に相當する欄の爲めに四頁乃至七頁位を受けしめ度い。而して從來の文苑欄に相賞するものゝ爲めに此の二二頁を分與したい。しかして其餘頁には囚れざる眞率にして大膽なる校友諸兄の感想若くは告白を載せたい。曾ての紙上に見ねた「盛岡で習つた林學と、木曾で習つた林學との間に、幾許の徑庭がある。」といつた萍生兄の冷罵。「岐蘇から內村鑑三輩や志賀重昂輩が飛び出した所で、決して母校に背くものでない」といつた松樹庵氏の素破抜、更に一歩を進めて自己觀、校友觀、社會觀母校觀、個人觀、自然觀等の纏つた評論、其周圍の事象及事件に對する明徹にして痛快なる觀察、他と吾との間に於ける眞率にして忌憚なき討議實生活上に於ける信念の大膽なる主張等を掲載したい。

新しき文苑欄、其所には前節と等しき內容を持つた詩歌又は叙事文小品文、特殊な色彩を有つた紀行文書簡文等を掲載したい。森の描寫より其人の自然觀が覗い知られ、引いて人生觀までも窺知し得られるといふやうな、眞に眞面目なる文章、即ち文字の操りに非る人達の獨創の香高き文章をこゝに掲載し度い。しかる時、もはや本欄に對して空疎などゝ叫ぶものはなくなるだらう自己の無智を敢て公開しようとする愚者にてあらざる限り。

最後に殘された二頁、乃至四頁これが雜報欄で、學校記事、校友會記事、寄宿舍通信、會員消息などが載せられるべき所である。あの書き方即ち報告の仕方にも、囚れから解放されて貰い度く思ふものが、ちよい〳〵見受けられたやうに記憶するが、あれなど今少し自由なる見解と書き方とを要求したく思ふ。うの狀態を完全に知らして貰へるものなると同時に、其筆者の全體をも窺はれるやうな床しい報告を希求する。

以上で略說き得た心算であるが、尙特殊なものに就いて一二卑見を述べたく思ふ。

彼の高樋會山兄一派及他の二三派の人達によつて書かれつゝある地方校友の消息など面白いもの〻一つに屬する。曾て會山兄がうの稽程一千日中に、各地校友の消息を本誌上に掲載すべきであると喝破したは、確に一個の卓見であつた。けれ共氏は其意味を多少誤解しつゝある。兄等によつて現今頻りに書かれつゝあるものが、一種の面白味を感せしむると共に、飽き足らなさを思はしむるとのは何故だらうか。僕はこの自問に對する愚鈍なる自答を一時避けて、吾敬愛する會山兄にこの疑問を捧呈しようと思ふ。

次が松樹庵氏の「下畑德十君を憶ふ」などの種類のものも囚れざる筆もて書かれたるものなる以上、面白きものたるを失はぬ現に友としつゝある人に向つて、この種の題下に評論を加へて見ることも又決して惡いことではなからうと思ふ。

校友各自の生活狀態や、遠地からの眞面

目な通信なども歡迎すべきものであり、修學旅行日誌、あれ等も獨創ある筆になつたものであつたなら、面白さ限りないものであらうと思ふ。

尙彼の會費領收報告、あれなど何でもないものゝやうではあるけれど、頁數の少い本誌にあつては隨分問題を惹起する所のものである。しかしあれは今の所止めることは不當であらうからと、六號活字で組むことに、吾々の在校時代に決めたことがあつた。矢張これ以上の處分案はちよつと見付るまいと思ふ。(未完)

余の測高器付輪尺に就て

木村康明

吾人林學に志す者常に測樹高並に輪尺の不備なる點を改良すると同時に出來うる限り樹高直經を速かに知り得ん事を熱望せざるはなし僕亦此點に考案を回す事二星霜やゝ完全にして理想的なる測高器付輪尺を新案し本年三月末日新案特許を出願せしに幸にして特許査定濟となり七月二日付を以て特許登錄證下附の命に接したれば之を社會に公にせんとす學術上實務上多少の裨益する處あらば余が望外の幸なり

余が測高器付輪尺の從來の測高器又は輪尺と異る點を列記すれば

一、第一圖に示す如く容積を縮少せし事

二、測高器を使用するには測らんとする立木の側に一定の高さを記し夫より若干距離を隔てたる位置に於て照門を外方に開き之を上下して其中心と記點とを見透し其測高器の目盛により先づ其記點の高さに對する度を知り次に其位置の儘更に照門を上昇して立木の梢を見通し其得たる示度に記點の示度を加算し比例式に依りて立木の高さを知り得れば測者の位置より立木の根元までの距離を測定せずして直ちに其樹高を測定するの利あるものとす

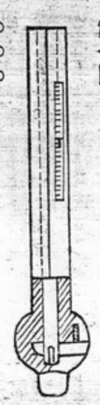
三、此器は一器にして立木の徑と高とを測りうる一便あるのみならず容積を縮少しうるを以て保存携帶共に頗る利便なり

四、此器は第二圖に示す出く鞘の後端を支持し兩鞘により立木を挾み尺度の目盛に依り其徑を知るものにして木の太き場合には尺度を引出し細き場合には把手を起し之に依りて止杆を上昇し置き鞘を內進して任意に使用しうるものとす使用終れば鞘を分離し尺度を鞘の橫溝より拔出すと共に縱溝內に倒し鞘を被せて容積を縮少するを得

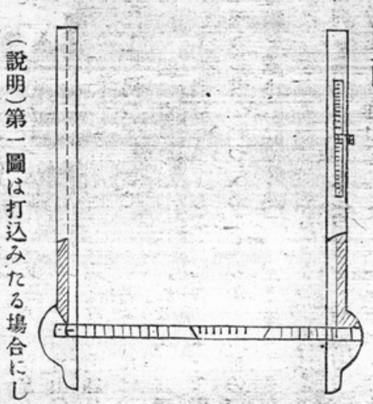
五、輪尺の裏面に蟻溝を穿ち之に尺度の表面に付せる軌條を嵌め伸縮自在ならしめ尺度の一端に長孔を穿ち其先端に近く孔內に止針を植ゑ此部分を縱溝を有する鞘の橫溝內に嵌め支軸を貫裝して尺度の拔き差し及起倒を自在ならしむると共に脫却を防止す

尙本器は二尺の感尺にて四尺まで直徑を測るの利益あり

第一圖



第二圖



(說明)第一圖は打込みたる場合にして第二圖は便用の場合なり

右列記せる如き諸點に於て在來の器と比較對照の上學理上實際上御批評あらば誠に幸甚なり

(因に新案特許番號は第四〇〇七八號なり)

土地は資本なりや

水の都にて 酒井光義

左の一篇は故酒井君の遺稿にかゝり暑中休暇前記者に送り來れるもの眞に君が絕筆なり噫

土地は資本なりや否に關する問題は屢經濟學者間に於て論爭する所なり

從來經濟學者にして土地を以て資本に在らずと主張する者は土地と資本とを區別するの理由を大体左の三點となす。

一、資本は生產物なれども土地は生產物にあらず

二、土地と資本とは使用法の上に大差あり土地は不動產にして永久の使用に耐ゆれども資本の多くは動產にして永久の使用に耐へず從て土地には獨專的利益を生ずる事容易なれども資本には之れの生ずる事難し

三、主として土地を使用する產業と主として資本を使用する產業とは大いに經濟上の性質を異にす、例へば農業に於ては收益遞減の法則行はるれども工業に於ては收益遞增の法則行はるゝが如し

然し乍ら斯くの如き理由に基きて土地と資本トの區別をなさんとするは理論上理由なき事なり、土地は生產物にならずと云ふも現今に於ける耕地の人爲に依りて變化されたる程度は甚しきものにして天然の儘なるは殆ど之れなきなり、又土地が自然物にして生產物にあらずとするも生產物ならざるものは何故に資本と稱する事能はざるか、多額の資本を投じて購ひ得たる敷地は何故に資本たる事能はざるか此の種の學者が資本の要件として生產物たる事を要すと云ふ點を擧ぐる所以のものは人の勞力の產物たる事を以つて資本の要素と看做さんとするものなり、然し乍ら財の價値は必ずしも勞力の分量に依りて定まるものにあらず從つて經濟上の財たると否とも又勞力の產物たると否とに基かざるなり。

されば資本は必ず過去の生產物たる事を要すと斷定するは何等の理由なき事と云はざるべからず世人の普通考ふるが如く資本を以て經濟行爲に利用せらるゝ財の經濟價値の總計なりと看做すに於ては土地も亦資本と云はざるべからず。

風塵百題

國山生

復活(三)

復活!!! 何たる向上的なる文字なるよ! 復活とはナザレのイエスの宣告を受けたるものゝみの謂に非らず洗禮に依り神の子たるは卽ち宗敎上の復活なり余の稱する復活は甦生を意味するものなり甦は死より甦へるのみを云ふにあらず物質的生活より精神的生活に入る是復活なり甦生也

○犬塊白衣を脫し乾坤一轉すれば萬象は茲に復活す見ずや百花妍を競ひ春草鬱蒼として滿地を飾るを

○北海タイムス論ずて曰く

眞理よりも利益を愛し正義よりも黃金を愛するものは現代思想なり、黃金と利益とは世を益すると同時に亦人を毒するものなりと、

寔に黃金と利益とは劇藥の如し、劇藥は特効あり然れども平時モルヒネを使用すれば病を癒せずして人を殺す也

○腐敗せる溷濁せる現代風潮を一新するは現代青年の任務なり徒に英雄を崇拜し以て妄想狂たる勿れ、先輩の指導を受くるは可なり然れども先輩の指導を受くることを事とするものは愚なる後繼者なりと信ず

○純正熱烈の愛國心を發揮し擧國一致の精神を皷舞するには青年の熱火によらざるべからず四顧左眄利害の念に拘はるものは革新の烽火に腰を拔かすべし革新は青年の心の火也進步は青年の力の花なり

○希望に富み生命に富む現代青年は此世界的大變遷に處し奮勵努力あらゆる現代的溷濁汚臭の空氣を一洗し以て光榮ある未來の王國を建設すべきなり是卽復活也(六、七)

文苑

赤石山に登る記

宮川丑作

下伊那在住の時の事なりき、一ト歲(大正二年)赤石山に登りたる事あり、登山中尤

も困苦を嘗めたる事とて之を追懐するに今尚興味の津々たる者あり記憶をたどり錄して林友誌上を汚す事とせり

一行は指導者たる上伊那農學校河野先生、飯田女學校佐藤、横山、紀野諸先生、市田村加藤、座光寺村今村の二青年夫れに予及人夫總て八名但し大河原より前澤郷先生及び人夫三名加はり拾壹名となる

八月十七日　飯田發大河原泊

午前六時飯田女學校に集り校庭にて記念の撮影をなし七時出發す

上郷、座光寺、下市田を經、明神橋を渡りて天龍を越ゑ神稻(クマシロ)村を過ぎて河野學校に少憩夫れより生田村に入りて漸く坂路にかゝり峠の茶屋にて晝飯

午後二時半出立北條峠と呼べる急坂を降りて小澁河原に出で桶谷、落合などの部落を經大鹿村なる大河原市場に着鑛泉宿栢屋に宿す時に五時半此日行程凡九里夜小學校職員數氏と郵便局員との訪問を受け明日の準備を整へなどして一同寢に就く天候不穩の模樣なり

八月十八日　大河原發小澁泊

昨夜蒸暑く寢苦しきに蚤蚊に迄攻られて眠れざりしに夜半附近に小火ありて驚かされ夢現の間に夜明けとなりぬ明くれば細雨霏々として霧れべくも見ゑず此夜は露營の都合なれば雨にてはと豫定を變へ小澁まで進むことゝなし午前中昨夜の寢不足を補ふあり葉局に對するあり謠曲を合するあり各々時の到るを知らざりき斯くて午後一時出發細雨を冒して小澁川に沿ひ或は昇り或は降りて和蘇(ワソ)に香坂彈正の遺蹟を尋ね福德寺の特別保護建造物を觀尚進みて釜澤(カマワサ)に至り尹良親王の御墓に詣で淵月前澤君より夫等に關する物語や說明を聽きつゝ五時頃小澁なる鑛泉宿に着す湯は昨夜のより佳なれど宿とは名のみ只雨露を凌ぐに足る谿間の一茅屋に過ぎず此日行程凡三里　小澁發赤石露營

八月十九日

午前四時起床一同沐浴齋戒し六時微雨を冒して彌々登山の途に就く小澁川の清流を徒渉する事二十有餘回深さ股を沒する程なれば下半身乾ける所なし途中高山(タカヤマ)の瀧と云へる勝景を左に眺め（此瀧歸路に憂き目を見たる目標となりしこと面白けれ）九時半頃廣河原と云へる登山口に着茲に一同焚火して暖を採りつゝ午飯を喫す時に雨全く霧れたり斯くて十時少過ぎ出立途なき途を別け進みて間もなく森林帶に入る太古の儘なる樹林天を摩して繁り重なり晝尚夜陰の如し加ふに急峻前者の蹶は正に後者の頭上に在り笠を外づせる一人が腦天に繃帶を施せるなどの喜劇を演じ喘ぎ喘ぎて午後三時と云へるに漸くにして大障子山の中腹に達せり茲に暫く焚火して一行を待ち合せ息を入る五時頃頂上に向ひて出發し六時着不幸霧深くして展望を恣にする事能はず頂上にては野營も叶はねば更に引返して大障子山の峽谷を降ること二十餘町其處に野營の陣を張る予は頂上より少しく一行に後れて着しけるが先發隊は既に天幕を張りて養焚の業に忙はしげなりし時既に黄昏殆んど匂ふが如く天幕の中に躍り込めりテントと云へど完全のものに非ざれば雨は漏り風は荒びたれど前後も知らず寢入りたり頂上標高三千百二十米野營地二千六百三十米

八月廿日　赤石發荒川岳露營地泊

佐藤、紀野兩先生は茲にて一行と別れ昨日の途を降り鹿鹽にて待合す事とし六時頃出立昨夜我等の陣地に宿を乞へる東京の登山者二人連れあり今朝下山して途に迷ひ九死に一生を得たる遭難談あり歸りて鹿鹽に之を聞く

我等は右二組に別れ植物の整理を終へ出發荒川岳に向ふ(三千八十米)此間横山氏は白馬以外に無しと信ぜられし羽衣草を採る斯くて午後一時頃頂上に達す亦雲霧に閉されしは遺憾なりき夫れより駿河方面に露營地を探りつゝ降り或地點に水を發見せしも時未だ早かりしかば前途にもと望を懷き更に二つ程澤を越ゑしも水を見出す事能はず然れど時已に遲くなり進退谷まりしかば或地點(惡澤(ワルザワ)とか呼べる)を相して野營する事に定めぬ一滴の水も得難ければ養焚の世話もなければ食ふ面倒もなし唯生木を伐り集めて焚火を爲すのみ或者はミルクの一匙に或

者は氷砂糖の一塊に或者はウイスの一杯に饑渴を忍べり地亦傾きて僅かの平地も無ければ陣地も思ふ樣にならず予は二三の人々と焚火して終夜其邊りに身を持たせて交睫ろめり野營地二千八百米

八月廿一日　露營地出發井川泊

今朝も食事の世話も無ければ植物の整理を終り六時頃出發或時は險崖膽を寒からしむる如き所を匐ひ登り或時は登山者に對し鐵條網の惑ある偃松の間を泳ぎ小澁川に落下する高山の瀧を目當に進みしに中途道を失して進む能はず案内の人夫は右せんと云ひ河野先生は正反對に左ならんと云ふ衆議其中間を採る事に一決し濃霧の中を進み行きしにやがて細谷川(ほそたにがわ)僅かの水溜有るを見出し一行の喜び一方ならず水を得たると此澤を降らば目的の瀧に出づる者と信じたれば也直に河原に世帶を開きて食事をなし互に舌鼓を鳴らしつゝ昨夜已來の饑渴を醫したり思へば此時既に此胥の憂目を見る運命の定まりしを神なきわが身の知らざりしこそ笑止なれ

斯くて微雨を冒じて出發河を途に進みたり時は夜第に過ぎ川巾は彌廣く（三四間）あらんかと行けども行けども果てしなく最早徒渉も叶はぬ迄になりぬ一行互に不安の念にかられつゝ尚も降りしに遙か彼方の河中に新らしき木材の積み重ねられあるを見出す訝かり近寄れば二三の木伐の有るあり川緣より伐り出すにがある此處は何處ぞと問へば木伐等も驚の目を見張り（上流より未だ嘗て人の來りし驗も無ければ）大井川の上流なりと云ふ一行開いた口が塞がらざりき時已に四時を過ぎ水源地より少くも三里以上を降りたる處なり

斯くであるべきに非ざれば人夫等に懇請し其小屋に一夜を明かす事とせり一行に案内者もあり地理に通ぜるもあり加ふるに川魚の住める瀧の上流としては川巾の餘りに廣く標高の餘りに高き（約二千米）幾多疑問の存せじに濃霧は四塞し雨は降り頻り地圖さへ披く能はず終に此失態を演ずるに至りしぞ物笑の種なる

此處は大倉喜八郎氏の經營に係る島田なる製紙會社の原料を搬出する場所にして井川の邊り小西又と云ふとか四つの小屋あり人夫總て六十餘人長なるを大庄屋と呼び岐阜縣の代太田某と云ふ懇切に待遇せられしは一行の深く感謝する所なりき

食後參謀本部の地圖を披き又は人夫等に尋ねなどし如何に故郷に歸るを得んかを許定し漸く一條の活路を見出し寢に就けり

八月廿二日　小西又發鹿鹽泊

朝六時小屋なる主の厚意を謝し又雨を冒して出發更に大井川を降ること十數町にして其支流なる中俣川に到り其を溯りて三伏峠に達せり（標高二千六百米）時正に十二時一其間凡四五里途なき所を河に沿ひて昇るなれば深さ股を沒する邊りを涉ること實に幾百回加ふるに雨さへ降りしきり全身殆んど乾きし所なく峠に近き水源の邊りにて雨中に立ち乍ら握飯を嚙りたるに手さへ凍ゑて用を爲さゞる程なりしがやがて雨漸くはれたり夫れより谷を越え荆をくゞりて峠を降り元の釜澤に出でゝ大河原學校に立寄り太田校長等に有りし事ども物語り昨夜已來の配慮を聞取り和歌や記念の物品を頒たれ前澤氏と別れを告げ燈を點じて鹿鹽に着きしは十時頃なりき佐藤紀野兩先生の喜亦一方ならざりき

此日行程實に十數里河を涉り峠を越へ雨を冒し寒を凌ぎ困苦實に名狀すべからざりしが指導者たる河野先生の沈着健脚は云はずもがな十貫目以上の荷物を負ひたる人夫等に至るまで些の閉口垂れ無かりしは一行の密かに微笑を禁ずる能はざる所なりし尤も飯田より伴ひたる一人夫は我校の原常夫より尚强のものなりしに如何に懲りたりけん歸りて嘆息して曰く孫子の代に至るまでも山登りは爲せまいと

八月廿三日　鹿鹽發解散

鹿鹽は大河原と共に大鹿村の部落名にして溫泉の湧出する所なり朝八時出發もと來し途を逆に落合桶谷を過ぎ北條峠を上りて峠の茶屋にて晝飯夫れより降りて河野學校に立寄り職員諸氏の厚きもてなしに預り座光寺村なる横山先生の宅にて慰勞の盛宴を張

られ解散

湯本女學校長亦痛心一方ならず今宵も待ちあぐみて横山先生宅まで參られ昨夜以來讀みたる歌など朗詠せられ一行の無事を祝せらる我等は夫れより飯田なる寓居に歸れり此行或は雨に祟られ或は途を誤り或は斷食し具さに困苦を嘗めたりと雖容易に機會を得ざる赤石荒川の仙境に登り下伊那の別天地なる大鹿村を探りて南朝の一棟梁たりし良親王の遺蹟を訪れ過ちの功名に大井川の上流など泳ぎ廻り柚小屋に一夜の宿を請ふなど有形無形幾多の經驗と教訓とを得たるを感謝するもの也。

山上雜記

日光山人

○

近時登山熱の流行日を追うて盛なり、山人亦此熱に浮かされてこの記を書く、固より熱の加減なり順序も主義もなし所謂出鱈目なり。

○

登山の快は何物も之を侵す能はず、試に高岳に攀ぢて下界を俯瞰せよ、胸中濶然何等の不安なく富貴なく黄金、戀愛亦なし宛然是神の國にあるを覺ゆ宜なり以て精神修養に資することや。

○

登山期は秋を以て第一とす、何となれば夏は雲多し春は寒し冬は更なり然らば秋氣清く冴ゆる夜や曉風膚を吹いて滿霜冷やかなる朝の爽快さを思へ。

○

山大登山すること十餘回、然れども未だ天狗たるに任せず回顧すれば七歳の夏佐州金北山（海抜三千八百尺）に登りしを始めとし前後數回後蘇門に入るに及んで御嶽（一萬百餘尺）及駒ヶ嶽（九千九百尺）に各々一回其他下りては紀州高野山、大和多武峰、上州妙義山等を廻りて今は野州男体山（八千百九十尺）上に夏期生活をなしつつあり因に登山者が山土産として石楠花を手折る事金北男体共に然り尚ほ此他にもあるべし

○

山上淺間の噴煙濛々たるを望む又感なきにあらず山人や信州の育ちなり我懷しき第二の故郷なり彼の四周山を以て圍まれたる中央高原に十州を睥睨するブライトを感せずや余は最も信州を愛す信州には確に他に見ざる或物を有す何ぞ進取の精神これなり剛健なる意志これなり由來人物を出すと此國の如きは稀なり蓋寒暑共に烈しき氣象にも依るべし然して山岳の力與つて大なるを知れ兎に角信州人は活動的なり此意味に於て或は淺間は信州の象徴なるか。

○

山上に立ちて淺間の黄煙を瞰下す赭々たる禿山は恐ろしき赤鬼を偲ばしめ夜間の火炎は眞に慘憺たる地獄を思はしむ山麓は即ち秀麗なる山中の湖なり僅に合潟峠を以て隔つ植物界亦峠の半面を限る瀾邊の新緑及紅葉は白帆の馳走と相映じて是亦極樂の感あり人呼んで地獄極樂といふ斯る例は幾多あるべしたゝ自然と人工の別はあれど

○

一層雲下界を閉ぢて滿目漠々たゞ富岳の我に對するあるのみかゝる時羽化登仙を思ふ時に筑波の艶姿雲表に出でゝ詩を呼べとも遊子徒に爽快を叫ぶ

○

七里の並木蜿々として盡きざる所白煙近く走り來る知らず山人此處にありて汝を迎ふるに應ふるや

○

白根の彼方夕照沈まんとして萬象殘影をとゝむる時我は宇宙の終末を想ふて止まず

（八月廿五日男体山より）

山、山、山、

（旅行日記の中より）岩田生

（下の中）

播但の境、山重り鐵路の勾配急なれば汽車は喘ぎ〳〵て走らず苦しき吐息と共に煤煙と埃とを吐くこと甚しく剩へトンチルの去來忙しければ窓排して清冽の氣に接する事もならずされば輓く汽車も苦しからむも輓かるゝ吾等も亦更に苦しかりし此邊に可成大面積の杉檜の植林を見る極めて疎植なりその爲にや各樹木は基部より多くの枝を擴げて細長き圓錐狀をなし恰もビール瓶を羅列せるが如き觀を呈せり吉野の密林に於

ける通直完滿の林木とは好對照なりし

生野銀山—日本海に注ぐ水と瀬戸内海に注ぐ水との別るゝあたり膚破れ肉落ちたる巉峭の半天に躍出する彼方に黄煙濛天に漲るを望む金銀の年産額百五十萬圓之あるが爲に生野邑に住する者八千餘實に本邦屈指の鑛山也されど爲に山靈水白の破壞されたるを惜しむ。

生野を過ぐれば鐵路下り坂となりて汽車を矢の如く走りて心地よし山開け水増したる所に和田山あり

和田山—山にあらず播但線と山陰本線と接する繁驛なり

鶴山—動物園、博物館などにて窮屈なる金網の中に收容されたる鶴は屢々見る所なれど未だ嘗つて野外遊ぶ狀を見ざりしが和田山より城の崎に至る車中に二羽の田鶴が畦に下り立ちて餌を漁るを見る長閑にして優に氣高き姿—急ぎて傍の人達を喚ぶ頃は遲しこの時のみ徒に速き汽車は早や轉じて其影は見ねざりき八鹿驛東方凡り三里に鶴山あり日露戰役の初年十數羽の鶴來りて山腹の松に巣籠せしより爾來毎年數羽の雛鶴育つと蓋し鶴山とはうれ以後に名づけられしものならん今見し鶴は正にこの鶴山のものなるべし

石山—名高き玄武洞の事を里人は石山と稱す玄武洞とは柴野栗山先生の命名なり朝來川東岸の蜿蜒たる丘阜の中腹に一大岩窟をなし洞の天井の裂罅より飛泉直下し床なる昌明鏡の如き泉地に灑ぐ高さ二三十尺の柱狀（五角六角七角等）の岩石悉く七八寸毎に横に裂理あるもの洞の壁をなし柱をなして實に奇觀を呈せり而してこの個々の石は人工を要せずして好個の建築用石材とすべければ往昔は盛んに石を掘り採りたりと現今にては石の採掘を禁じたれ共其側方より同形の石を採掘しつゝあり。

日は既に落ちて流れ緩かなる朝來川のほとりに里人の鍬洗ふ頃城の崎に着く城の崎の一夜に五躰融暢眞に十日間の旅の疲憊を流し去り又向後五日の旅に要すべき勢力を保養したる感ありたり

福知山—阪鶴線と山陰本線との接續驛福知川の清流に臨める山間の小都市なり北方に酒呑童子と源頼光とのロマンチックの出所

大江山—の巍立するを見る大江山の南方に但馬より丹波に入る道ありて住昔此處に關所を置けり小式部の「大江山いくのの道の遠ければ……」の歌は今の大江山にあらずしてこの大江の關のあたりを歌へるものなりと後年關を廢してより山賊此處に巣窟を構へて此の地方は固より由來川の便を借りて日本海に出で多くの船舶を掠めたり今其處に賊の住めるといふ洞穴殘存せりと

舞鶴軍港に到りて海軍工廠船渠軍艦等僅か三時間餘りにて見物し終り海舞鶴より鐵道連絡汽船にて宮津に向ふ海には緣遠き一行なれば大方は汽船に乘りて海を渡るは今が始めてなりされば悉く甲板に出でて新潮の香床しき海風を浴びつゝ壯大なる風景に神氣豁然たるを覺ゆ或は長閑けき漁村の風光に心奪はれしが軈て船の舞鶴灣を離れて外海に出づるや風稍々烈しく濤愈々高ければ寒さと船暈の不快さとに堪へず悉く船房に入りて甲板に人影を絶ちぬ

船宮津灣に入る頃日は全く落ちて夜色蒼然として海の底より涌き船を呑み綠の宮津灣はひ平和の村を滅し遂に風光明媚の山を蔽暗黑の中に葬り去られぬ輕き船暈だに覺えざる事を天に謝しつゝ獨り默然として舳に坐すれば船は旋水器の音高く夜と海との大靜を破りて走れり折しも行手遙の涯に赫焉として眞黑を點破するを望む之れ宮津の町なり汽笛着船を報ずれば一行を夢より覺めて船房より逼ひ出で足許危く宿に導かれぬ

天の橋立—誦みても見よ何ぞこの語の俗を離るることの遠き吾幼時より歌に詩に畫に之を慕ふこと切なりされど此處は遠く裏日本の偏境なれば到底此の風光に接することは能はずと思ひきや風流奇緣ありて今日しもこの畫中の人となり得るを思ひ思はず心躍りぬ宮津の町より小舟三艘を儆ふて分乘し朝凪の江上をゆら〳〵と漕ぎ出で舟夫の話に耳を傾け好風景を西顧しつゝ進む程に舟は籠神社の前に着く此處に舟を捨てゝ

成相山—に登る今日しも日曜なれば上下の遊人絡繹として絶ゆるなし中腹に成相寺ありて與謝の全景此處に萃まる寺の境内に一の臺石を設けらるる之に上りて江を背にし身を屈して股間よりのぞめば一里の沙洲大海と蒼穹との間に架せられ天の橋立か海の橋立か上なるか水が下なるが天か實に俗人の近寄るべからざるを思はしむ低徊顧望數回所謂股眼鏡をなして尚ほ去るに忍びざりき山を下りて天橋の翠松婆娑たる間を逍遙し切戸の文珠に詣で名物智慧の餅に智慧と腹とを造り再び小舟に乘じて滿帆の下に心地よき夢を結びつゝ宮津の宿に歸る

國境のおもひ

坂本光太郎

一

唐紅に彩りし、　夕日は落ちて鴨綠の
大江銀と流れゆく、　北朝鮮の夕景色

二

小田の蛙のみれなるで、野邊の蛙の鳴く聲に
漫ろ母國の偲ばるゝ、　北朝鮮の初夏の夜

三

優しき星の瞬も、闇にとびかふ螢火も
凉しく照す月影も、　共に眺めん人もなし

四
風にゆらるゝアカシヤの、妙なる葉ずれの音樂に露の白玉落つる時、共に歌はん人もなし

五
東の空を望む時、胸の思に堪へかねる此哀愁をしめやかに、語りあはせん友もがな

六
淋しき秋は只一人、自然の母のふところに歌諸共にいだかれて、清き思に醉はん哉

學校記事

○始業式　二旬の休暇終を告げ八月廿一日殘炎尚未だ銷せざるに早くも始業の日は來れり當日は校長の訓辭のみにて式を閉づ

○視察旅行　八月三十日三學年生一同は北村島氏兩教諭引率小川殿方面へ伐木運材其他に就き實地見學の爲一泊がけにて出發三十一日歸校せり

○前期試驗　本年度前期試驗は九月十八日開始二十七日終了の筈なり

校友會便り

我校友會辯論會は九月二日初秋の風薫る朝幾多のロマンスの含まるゝ校堂に於て催されぬ幾多論壇の雄將猛卒が振へる熱辯は杭の原々頭に一大光焰を揚げぬ左に芳名を掲げて聊か妄評を試みん。

開會の辭　長部　星加正雄君

勤勉と報酬　輕快な口調を以て勤勉と報酬を說き更ちに一轉して現代の青年論に及び演者獨特の快辯を振ふ輕快にして莊重なるは君の特色か

修學　富士川金次君

柔かい調子を以て修學の要を叫ばる處女演說としては成功の方であろう。

偶感　伊東厚君

當日に限つて音吐低く態度に生氣なかりしは其缺點之も來るべき試驗熱の爲か。

偶感　大瀨房人君

記者は內容よりも音聲よりも態度がよかつたと思ふ。

青年は須らく大なるべし　唐澤繁夫君

朝々たる音吐潑剌たる態度先聽衆の眠氣を醒すに足る音吐に於ても態度に於てもこの日の白眉但し一寸場當りが過ぎた樣に思はれる

To lee or to do　平田久良治君

戰時に於ける學生の覺悟　古山五八君

初陣の舞臺に立ちて飽く迄沈着なる態度と力ある聲とは聽者を喜ばすに充分であつた

自然の愛　北川春君

四季に亘りて美はしき形容詞を配して美しき自然を謳歌す嗚呼君も又和製のタゴールなるかな。

自己の革新　長坂清人君

本校の花形精練の演說だ論議縱橫例の如く華麗を極めた內容に於ても當日の白眉

演說者の資格　瀧澤銀治郎君

長髮の豫言者的の風采當日隨一の人氣役者笑聲の裡に述べて演壇を下つた御手際天晴

偶感　山本茂君

入學來の處女演說としては落ち付きもあり內容も有つたがゼスチュアー等には改善の餘地がないでもない

借金すべからず　丸山林一君

比較的缺點もなく先以て成功の方であらう

嚴島に就て　北村先生

劈頭嚴島の美を賞讃された例の如く明快なる口調にて宛然嚴島の絕景は眼前に展開されし如く聽者一同をして恍然として時の移るのも忘れしめた。

官廳の話　西澤先生

將來余等にとりて最も必要なる官制事項に就きて有益なる御訓話を講演さる

閉會の辭　長部

會員消息

○上水壯三君　昨年檢査の結果輜重輸卒甲種に合格せられ九月一日高田輜重兵第十三大隊第一中隊に入營

○田中榮一君豐橋聯隊に在營中の同君は九月一日青島守備として同地向け出發右につき同聯隊勤務中の同窓川崎、川合、早川、代田の諸君は送別の宴を張り同氏の行を壯にせし由

○山崎三男君　青森縣北津輕郡中里小林區署に轉勤

○柳澤得衛君　小千谷工兵第十三大隊に入營中の同氏は木曾川架橋演習の爲め九月十一日福嶋驛通過の際途中下車をなし七宮校長其他を訪問せり

○征矢朴郎君　九月廿日より四週間勤務演習の爲台北第一聯隊に入隊の筈

○征矢野餘所夫君　駒場實科卒業後鄕里に歸省中なるが近々帝室林野管理局本局技手となりて赴任の筈

○川崎本雄君八月中豫備召集として豐橋聯隊に勤務中の同氏は九月十五日頃歸鄕の筈

○東原智君　秋田縣大館小林區着第五號乙二ッ屋保護區官舍詰を命せらる

林友代領收報告

金一圓　吉川眞夫君

金二圓五十錢　鹽川金次君

金一圓　安井嘉一君

大正五年九月廿三日印刷
大正五年九月廿五日發行
長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人　安井正夫
長野市四後町丙二十一番地
印刷者　田中彌助
長野市四後町乙二十一番地
印刷所　長野新聞社活版部
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　鹽澤書店